

《ダルマ通信》

2006年7月30日

皆さん、大雨の梅雨が明け酷暑が続きますが、めげずに元気で今夏を過ぎて下さい。愚生、暫く海外にいて休信しましたが、久しぶりの日本は天候も政局も不快感が極めて高く、余生が縮まる思いをしながら、何とかこの鬱陶しさを打ち払えないものかと念願し本信を再開しました。目下の世界情勢に急き立てられた凡脳の所為(煩惱?)ですが、今後とも飽きずにご高誼ご鞭撻を願います。

さて、目下の世界情勢と云えば、何と云っても、アメリカが後押しするイスラエルのレバノン攻撃による西アジア情勢の新たな展開に注目せざるをえません。なりふりかまわず理不尽を通そうとするブッシュ政権の野蛮な霸王ぶりと相俟って、人類社会を侮蔑するイスラエルの凶悪非道な残虐行為は、既にその被害諸民族をして彼等の生存をかけた徹底抗戦へと追い込み、やがて、その成否に自分達の命運を重ね合わせる他の諸民族をもこれに連帯させ連携させて戦線を拡大することになります。

元々、パレスチナとレバノンに対するイスラエルの侵略戦争は、唯我独尊のシオニスト政権が暴力大国アメリカの野蛮な帝国主義政権を操ってアラブ・イスラム社会を破壊し西アジア一帯を制覇しようとして仕掛けたものです。従って、この戦争は、この数年来悪あがきを続けるアメリカのアフガニスタンとイラクに対する侵略戦争に連動し、やがてシリアとイランに拡大されるでしょう。

こうして拡大増幅される侵略勢力の暴虐は、イスラム世界の各地で民衆を生存をかけた徹底抗戦へと追い込み、これら抗戦勢力が、いずれサウディアラビア・ヨルダン・エジプトなどの対米屈従政権を打倒してアラブ・イスラム諸国の統一戦線を形成し、イスラエル・アメリカの侵略軍に対抗することになるのです。

他方、イスラエル・アメリカの侵略勢力は、益々増大するイスラム世界の抵抗と抗戦に対して、核兵器を使ってまで破壊と殺戮を繰り返し、暴虐の限りを尽くそうとするでしょう。その結果はどうなるでしょうか。特に、日本の産業経済や政治体制はどうなるのでしょうか。そして、人類社会は各地でどのような影響を受け、諸国諸民族はそれにどう対応するのでしょうか。

いずれにしても、イスラエル・アメリカの侵略勢力は結局人類全体を敵にまわすことになり、そこで文字通り人類の存亡をかけた未曾有の世界大戦になるのです。今回のイスラエルの無謀なレバノン侵攻と西アジアにおけるアメリカとイスラエルによる侵略戦争の拡大は、この世界大戦が既にその初段階に突入した事態と観るべきでしょう。

それにしても、イスラエルとアメリカが猛り狂って公言通り核兵器を使う前に、何とかこの凶悪な侵略勢力を押さえ込む方途はないのでしょうか。目下、世界中の有識者が事態の進展を憂慮し対応策に苦慮しており、西アジア諸国では勿論のこと、欧米諸国でも良心的で勇敢な人々がこの侵略戦争に反対する大衆運動を拡大し強化しています。

ところが、狂暴な侵略軍の度重なるジェノサイドが連日世界中に報道されているにも拘わらず、目立った抗議デモ一つ起こらない安閑とした日本の現状は、衆愚社会の無関心と鈍感さの所為でしょうか。これが再びファシズム体制の温床となり、そこで「国民」大衆は調教されて挙国一致の暗愚集団に化し、かの覇権超大国の忠実なる「同盟国」として侵略戦争の暴虐に体を張って加担させられるのでしょうか。

過日の「日米首脳会談」では、ブッシュと小泉が、恰も兄弟のように振るまいながら、今後の「日米同盟」を「地球的規模での協力のため」に強化してゆくと宣言しました。このおぞましい宣言を暗澹たる思いで聞いた者は、愚生だけではないでしょう。勿論、小泉の後を誰にやらせるかはアメリカの指図でとっくに決まっていたのです。福田の不可解な引き下がりとは、この国が敗戦後依然としてかの野蛮大帝国の忠実なる属国であり続ける背景を通して推察せねばなりません。

まもなく8月になると、今年も例年の如く「終戦」に因んだ年中行事が始まります。「核兵器反対!」・「戦争反対!」・「平和を守ろう!」と純情健気な人々が集まり氣勢を上げ、腹黒い連中は、又しても「お国のために戦い命を捧げた人たち」を尊崇すべしと靖国参りをして「国民」の「意識改革」を呼びかけるでしょう。しかし、いずれも、漠とした心情だけが露わで、過去100年余りにわたり国を挙げてやってきたことに対する史実に基づいた真摯な反省がないのです。

そこには、同胞だけでも数百万を死なせ国土を廃墟にした戦争責任の追及もなければ、他のアジア諸国の民衆を数千万も殺し彼等の国土を荒らし回った侵略戦争の贖罪意識もありません。ましてや、「戦後の復興と経済発展」が、「朝鮮戦争」と「ヴェトナム戦争」に攻撃と補給の主要基地となって加担し、朝鮮とインドシナで数百万の民衆を殺し彼等の国土を破壊し尽くしたアメリカの侵略戦争の特別軍事需要によるものであることに対する反省は微塵もないようです。

それどころか、大方の向きは「戦後の復興と経済発展」が「日本人の勤勉さ」と創意工夫によるものと思いき、近年では、これが「お国のために戦い犠牲となった人々のお蔭」でもあると主張するやからに国の運営命運を任せる羽目になっています。

このような民族社会では、「戦争」も「平和」も漠とした心情に乗った観念でしかありません。いくら「戦争」や「核兵器」に反対し「平和」を叫んでも、せいぜいが「原爆許すまじ」と爆弾を恨み、人道と国際法を踏みにじって原爆を落とし落とさせた者達に対する怒りは発せられず、数々の戦争犯罪者らを糾弾することもなく、大規模組織的に戦争の残虐行為を継続させる巨大な軍事基地と軍需産業の存在を否定することもありません。従って、そこでの「戦争反対」も「平和をめざす」運動も、結局は大衆の漠々とした不満を発散させる捌け口でしかありません。

いくら「平和」を念願して、相手かまわず「平和」を唱え「平和」を説き叫んでも、それだけでは平和がやってこないことは、誰しも冷静になって歴史を振り返り考えてみれば分ることです。暴力で容赦なく他人の生活を破壊し他人を抹殺する凶暴な戦争勢力には、如何なる「平和」経も「平和」教も通用しないことは明白でしょう。この際、私達は、戦争に反対し平和をめざすことが、結局は誰に對し何をどうすることなのかをしっかりと見極めねばなりません。

現在、西アジア(アフガニスタン・イラク・レバノン・パレスチナなど)では毎日数百人が虐殺され、数千人が負傷し、数万人が住居を破壊されて生死のはざまを彷徨っています。彼等の3分の1は、いたいけな子供たちです。

誰が、こんな暴虐非道なことをするのでしょうか。云わずと知れた、超大国アメリカのブッシュ政権とアメリカが支援するイスラエルのシオニスト政権です。彼等の強大凶暴な軍隊が理不尽に他国に侵攻し殺戮と破壊を続けているのです。しかし、これに全面的に荷担しているイギリスのブレア政権や日本の小泉政権などアメリカに隷従する諸国の政権も共犯者です。更に、こうした暴虐非道を嘘と作り話で正当化したり隠蔽しようとするアメリカのマスコミと、その嘘と作り話を鵜呑みにして垂れ流す日本のマスコミなども、共犯者です。

目下、こうした連中が人類社会を破滅させようとする凶悪な戦争勢力ですから、戦争に反対し平和をめざすには、先ず何よりも、この戦争勢力に対抗して、その暴虐非道に反対し、それを阻止し排除しなければなりません。その為には、何と云っても、彼等の強大凶暴な暴力に対抗して戦い、彼等を敗北させなければならないのです。

そうです。これは、結局私達が人間として生きるか死ぬかの戦争ですから、どうしても、覚悟してこの戦争に参加し勝利をめざさなければなりません。その為に私達日本人が出来ること、成さねばならぬことは、先ず何よりも、(1)対米隷従の日米関係を清算し、(2)「日米安保体制」を解消して、(3)日本列島から全ての米軍基地を撤収させることでしょう。「世界の中の日米同盟」などは以ての外ですし、「日米関係を基礎に」と云う戯言には嘲笑して一蹴しなければなりません。

以下に掲げた一文は、この1週間インターネット上で世界中を駆けめぐり広く読まれた啓蒙の名文です。愚生の拙訳ですので、原文で読みたい方は <http://www.informationclearinghouse.info/article14128.htm>、<http://counterpunch.org/roberts07222006.html>、<http://www.antiwar.com/roberts/?articleid=9381>などを当たって下さい。

とにかく、筆者ポール・クレイグ・ロバーツ(Paul Craig Roberts)の経歴を知る者は大変な衝撃を受けるでしょう。彼は、アメリカのレーガン政権で財務次官を務めた著名な経済学者で、退任後は有力右翼紙誌の『ウォール・ストリート・ジャーナル』(Wall Street Journal)・『ナショナル・レビュー』(National Review)・『ビジネス・ウィーク』(Business Week)などの編集評論者を務め、またアメリカ帝国主義右翼の牙城スタンフォード大学のフーバー研究所(Hoover Institution)などで幹部研究員(senior fellow)として活躍した、謂わばアメリカ右翼陣営の大物です。その彼が、現ブッシュ政権の内外政策を厳しく批判して、イラク戦争にも猛烈に反対し、又ブッシュ政権の主要な内外政策の大前提となった9-11事件が同政権の謀略であることを鋭く暴いています[例えば <http://www.prisonplanet.com/articles/february2006/080206towerscollapse.htm>]。なお、この翻訳文中、括弧書き[···]は訳者の補足ですので注意下さい。

『アメリカ人であることの恥』

ポール・クレイグ・ロバーツ

2006年7月22日

温厚な読者の皆さん、あなた方は、イスラエルがレバノン南部で民族抹殺に取り組んでいることを知っていますか。イスラエルは全ての村人に出て行くよう命令して、その後で彼等の家を破壊し逃げる村人たちを殺すのです。こうすれば、誰も帰って来られないし帰って来る所もなく、丁度パレスチナ人からパレスチナを盗み取り続けているのと同じようにして、イスラエルは簡単にレバノンの領土を奪うことが出来るのです。

あなた方は、居住地域でイスラエルの攻撃によって殺されたレバノン市民の3分の1が子供であることを知っていますか。それは、国連緊急救済調整官のヤン・イーゲランドからの報告です。彼は、瓦礫に埋まっている遺体や負傷者を助けに行くことすら不可能だと云っています。と云うのも、イスラエルの空爆によって全ての橋や道路が破壊されているからです。イスラエルがどれほど頻繁に(殆んど常にと云えるほど)ヒズボラに対する攻撃目標をはずし市民を目標に攻撃しているかを考慮すると、イスラエルの砲爆撃はアメリカの人工衛星や軍用GPSによって誘導されているのではないかと考えられます。ここで、アメリカが共犯であることに驚いてはなりません。どうして、操り人形[アメリカ]はその人形遣い[イスラエル]ほど悪辣ではないと云えるのでしょうか。

勿論、あなた方はこのような事を知らないでしょう。何故なら、アメリカの新聞もテレビもこうしたことを報道しないからです。

ブッシュはとても自尊心が強いので、あなた方が知っている通り、彼はイスラエルのレバノン市民に対する大量虐殺を止めさせようとするあらゆる努力を妨害してきました。ブッシュは、国連に「ノー」と言い、EUにも「ノー」と言い、親米派のレバノン首相にも二度「ノー」と云っています。ブッシュは自分の一徹さを非常に誇りとしています。彼は、イスラエルの狂暴な行為を楽しみながら、自分もイラクで同じことが出来ればいと願望しているのです。

次のようなことは、あなた方を誇りあるアメリカ人にするのでしょうか。···「あなた方の」大統領は、イスラエルの砲爆撃から逃れようとしているレバノンの村人たちの群れに、首都ベイルートやレバノン中の住宅街に、病院・発電所・食料生産貯蔵施設・港湾・民間空港・橋梁・道路など市民生活が依存している全てのインフラ施設を砲爆撃することを公式に容認しました。それでも、あなた方は誇りあるアメリカ人でいられるのでしょうか。それとも、イスラエルの傀儡になるのでしょうか。

7月20日、「あなた方」の下院議会は、レバノンにおけるイスラエルの大量戦争犯罪に対して410対8で賛成投票しました。更に、APの報道によると、「あなた方」の下院議会は、アメリカ人全てを戦争犯罪の共犯者にさせるだけでは満足せずに「ユダヤ人国家の敵を非難した」のです。

誰が、この「ユダヤ人国家の敵」なのでしょう。

それは、土地をユダヤ人国家によって盗まれ、家やオリーブ畑をユダヤ人国家によって壊され、子供たちを路上でユダヤ人国家によって撃ち殺され、女性たちをユダヤ人国家によって陵辱されたパレスチナ人達なのです。彼等パレスチナ人は、障壁で囲い込まれて強制居住区域に追いやられ、自分達の農地や病院や学校にも行けず、自国内でイスラエル人だけのために作られた道路を走行することも出来ないのです。彼等は、イスラエル軍によって殴られ迫害されて自分達の町から追い出され、このイスラエル軍に守られた好戦的なシオニスト「定住者ら」によって自分達古来の町を侵略されているパレスチナ人です。更に、彼等パレスチナ人は、イスラエル「定住者ら」によって殺されるので、子供たちを家の外にも出せないのです。

イスラエル人の悪行に立ち向かうパレスチナ人達は「テロリスト」と呼ばれています。ブッシュがパレスチナに自由選挙を強制した時に、パレスチナの人々はハマスに投票しました。ハマスは、イスラエルに立ち向ってきた組織です。このことは、勿論、ハマスが、邪悪で反ユダヤで反アメリカで、そしてテロリストであることを意味します。アメリカとイスラエルは、[自由選挙でハマスが多数を制したパレスチナの]新政府へ渡すべき資金の全てを打ち切ることで、これに対応しました。民主主義は、それが産み出す結果がブッシュとイスラエルの望むものである時にのみ許されるのです。

イスラエルは決してテロを行わず、イスラエルの邪魔をする者だけがテロリストなのです。

ユダヤ人国家のもう一つの敵はヒズボラです。ヒズボラは、イスラエルがレバノンを最初に侵略した1982年に結成されたイスラム・シーア派の民兵組織です。その侵略の最中に、この偉大な道徳的ユダヤ人国家は、あちこちの難民キャンプにおいて難民殺しを企てました。このイスラエルの残虐行為の結果がヒズボラです。ヒズボラは、イスラエル軍に抗戦して打ち負かしレバノンから追い出しました。今日、ヒズボラは、レバノン南部を守るだけでなく孤児の世話や医療活動など各種の社会サービスを行っています。

要するに、ユダヤ人国家の敵は、イスラエルに友好的なアメリカの傀儡政権によって支配されていないイスラム国家なのです。エジプト・ヨルダン・サウジアラビア及び産油首長諸国[の政権]は、アメリカの資金か自国民から[打倒されないように]守ってくれるアメリカの軍事力のどちらかに依存しているので、彼等本来の立場に反してイスラエルに味方しています。しかし、自分達が支配する人民を代表しない墮落しきったこれらの政権は、いずれ遅かれ速かれ打倒されるでしょう。それは、ただ時間の問題なのです。

目下、ブッシュとイスラエルは、シリアとイランの政府転覆を狙って狂ったように懸命に事を推し進めているようです。しかし、両政権はブッシュ自身より広い自国民の支持を得ており、ホワイトハウスのバカ者[ブッシュ]はこのことを知らないのです。このバカ者は、シリアとイランをイラクのように「簡単にやれる」と考えています。…イラクでは、アメリカ軍自慢の10個師団が軽武装したわずかな反乱勢力によって釘付けにされていると云うのに。

もしあなたがまだ誇り高いアメリカ人ならば、あなた方の誇りはイスラエルやアメリカのために何の役にも立たないことを考えて下さい。

「あなた方」の下院が上院に続いてイスラエルの戦争犯罪を支持する決議案を通した7月20日、ワシントンにおける最も強力な圧力団体であるイスラエル系アメリカ人公共問題委員会(AIPAC)は、直ちに公式発表をして、「アメリカ国民はテロに対するイスラエルの戦争を圧倒的に支持し、この危機の時代に最も親密な同盟国[イスラエル]を支持しなければならないことを理解している」と宣言しました。

真実は、イスラエルが親米政権の一国[レバノン]を侵略することによってこの危機を作り出したのです。真実は、CNNの迅速な世論調査の結果やC-Span[議会活動を全米に報道する人気の高いテレビ放送会社]へ寄せられた人々の意見によっても明らかのように、アメリカ国民はイスラエルの戦争犯罪を支持していないのです。

アメリカの「報道」によって提供されるニュースをイスラエルが操作しているにも拘わらず、大多数のアメリカ人はイスラエルのレバノン市民に対する残虐行為を容認していません。ヒズボラはレバノン南部に展開しているので、もしイスラエルがヒズボラを標的に攻撃しているのであれば、何故イスラエルの爆弾がレバノン北部に落下しているのか。何故ベイルートに落ちているのか。何故、民間飛行場に落下するのか。又、学校や病院に落とされるのか。

やっと、私達は肝心の事にたどりついたのです。アメリカの上下両院がイスラエルの戦争犯罪を支持する決議を通しイスラエルの侵略に反対する人々を非難するに至って、これら議会は、アメリカがアラブとイスラム世界に敵対してイスラエルと同盟していると云うオサマ・ビン・ラディンの宣伝を確認することになります。

実に、一人当たりの国民所得が世界で最も多い国の一つであるイスラエルが、アメリカの対外援助を最も多く受ける国でもあります。この「援助」の多くがAIPACに還流されて議会における「私達の」代議員を選出するのに使われているだと、多くの人は信じています。

こうした認識はイスラエルに不利です。現にイスラエルでは、賢明な人達が壁に書かれているものを見て次々と国を去って行き、人口が減少しています。今やイスラエルは、その行動と非人道的な政策によってイスラエルの敵に変えられてゆく何億ものイスラム教徒に取り囲まれています。

イスラム世界の希望は、これまで常に、アメリカが和解の労をとって介入し、イスラエルにパレスチナを奪い取ったりパレスチナ人全てを難民にしたりすることは出来ないのだと悟らせてくれることでした。

これは、従来アラブ世界の唯一の希望でした。これが、私達の傀儡たち[アラブ諸国の親米政権]が未だに倒されていない理由です。この希望こそが、アメリカをしてアラブ世界で多少の威信をもたせた理由なのです。

下院の決議案は、AIPACの金で賄われたのですが、中東におけるアメリカの威信失墜に最後の止めを刺すものです。そのことは、まさにオサマ・ビン・ラディンが云うように、そして大半のイスラム教徒がそう信じているように、アメリカこそが実にイスラエルの傀儡であることを示しています。

希望と外交が失せた今は、アメリカとイスラエルには牙と爪だけが残されています。高慢なイスラエル軍は、レバノン南部の貧弱な民兵組織を打ち負かすことができなかつたし、イラクでは、かの高慢なアメリカ軍も、人口で多数を占めるシーア派との内戦を主に戦っている少数派[スンニ派]の貧弱な軽武装抵抗勢力を抑えることができないでいます。

アメリカとその傀儡師[イスラエル]は一体何をするつもりでしょうか。双方とも余りにも傲慢で偏執病なので自分達のひどい過ちを認めることが出来ないのです。イスラエルとアメリカは、空爆によってレバノン・パレスチナ・シリア・イランの民間インフラ[民衆の生活基盤になっている電気・水道・交通・運輸・通信・教育・医療など諸々の社会施設]を破壊してイスラム教徒の文明生活を不可能にするか、或いは核兵器を使ってイスラム教徒達を脅迫しイスラエルの欲求に屈従させようとするでしょう。

何らかの形でイスラム教徒を皆殺しにすることは、ブッシュ政権を全面的に支配しているネオコンが公言している狙いです。ネオコンのボス、ノーマン・ポドレッツは、中東におけるイスラム教諸国を打ち倒してイスラム教を根絶し、それを形骸化した世俗的儀式に変えるために、第4次世界大戦(ネオコンの考えでは「冷戦」が第3次世界大戦)が必要だと主張しています。

ラムズフェルドらネオコン派が牛耳るペンタゴンは、核兵器を持たない諸国に対して核の先制攻撃を行う新たなアメリカの戦争政策を起草しました。

ネオコンのデイヴィット・ホロヴィッツは、パレスチナやレバノンの民衆を殺戮することによって「イスラエルは文明世界の残りの人々がやるべき仕事をしてやっているのだ」と云って、戦争犯罪者らを文明人と同等視しています。

また、ネオコンのラリー・カッドロウは、[アメリカでの]イスラエル支持団体であるキリスト教福音主義派を躊躇させることになるレバノン人殺し[レバノンでの大量殺戮]によって「イスラエルは主[神]の仕事をしてるのだ」と云っています。しかし、主イエスは、どこで「前進して汝らの隣人を殺し彼等の土地を盗みなさい」と云っているのでしょうか。

これらの極悪非道な犯罪にアメリカ社会が共犯者となることは、アメリカが歴史において永久に呪われ罰せられることになるのです。
